様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：３４４１９
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2014～2015
課題番号：２６８８４０７４

研究課題名（和文）１８７０年代フランス文学・芸術のパラダイム再考：シャルル・クロを起点として

研究課題名（英文）Reconsidering the Paradigm Shift in 1870s French Literature and Art through Charles Cros

研究代表者
福田　裕大（FUKUDA, Yudai）

近畿大学・法学部・講師

研究者番号：１０７３４０７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：1870年代のフランスで見られた文学・芸術の変容のあり方を従来とは異なる観点から再考するため、シャルル・クロの周辺に集まった幾人かの人物の業績を調査し、それらの業績の相互関係を探った。重要な成果として、クロの兄であった医師・哲学者アントワーヌ・クロの著作を起点として、当時のフランスに普及しつつあった神経生理学の動向を跡づけたとともに、この科学的知との相互関係という観点から、同時代のいくつかの文学・芸術的運動を再評価するパースペクティブを得た。

研究成果の概要（英文）：In order to reconsider the paradigm shift in French literature and art in the 1870s from a different perspective, I conducted a research on some of the works by Charles Cros' contemporaries and sought how they were interrelated with each other. As an important result, I could trace the development of neurophysiology through the works by Charles' brother Antoine Cros, a doctor and a philosopher. From the standpoint of this scientific knowledge, a new perspective was found that would revaluate some of the literary and artistic movements of the time.

研究分野：フランス文学・メディア史

キーワード：フランス文学　文学史　文化史　思想史　シャルル・クロ　音響メディア

１．研究開始当初の背景

代表者はこれまで、シャルル・クロを対象とした研究を行ってきた。この人物は、『白檀の小箱』［1873/1879］ や『鉤爪の首飾り』［1908、死後出版］といった作品集を著しただけでなく、「色彩写真」や「蓄音機」といった現代視聴覚メディアの原型的テクノロジーのパイオニアとしても知られる。しかしながら、この「詩人にして科学者」である人物に対し、従来のフランス文学研究は副次的な関心を割くにとどめており、なおかつ、その際彼の科学者としての側面はほとんど等閑視されてきた。これに対し代表者は、このシャルル・クロという人物の詩作品のみならず科学的業績をも研究対象に組み込み、これらの実態を総合することによって彼の思想像を統一的に捉えるための研究をおこなってきた。

その成果を列挙すれば以下の通りである。まず、クロの考案した色彩写真や蓄音機が、外界の事象を記録する装置ではなく、眼と耳というひとの知覚器官の内的なはたらきを模倣するための技術であったこと。とともに、そうした模倣の対象とされたひとの知覚器官、とくに視覚のはたらきについて、クロ自らが固有の理論を練り上げていたということ。その際いわれた知覚理論が、世界と人間の内的世界との出会いを説明するにあたり、伝統的な主客の二分論を棄却し、「感覚世界」という中間領域を端緒に据えようとするものであったこと。さらには詩人としてのクロもまた、こうした中間領域たる感覚の水準に生じた微細な変化に目を向けることによって、世界と詩人とが接触するさまを作品化しようとしていたこと、等々である。

こうした独創的といえる考えを抱いた人物が周縁化され続けてきたという事実は、この時代のフランス文学・文化に関する従来の見取り図が、必ずしも完全なものではなかったということを示しているといえるだろう。そこで、当の人物のオリジナリティをそれ自体として掘り下げていくための研究ももちろん必要であるが、本研究では以下の通り、同種の問題意識にもとづきつつも、より開かれたかたちで問題設定をなすことにした。すなわち、シャルル・クロという存在を結節点として浮かび上がる同時代の知識や文化の水脈を可視化し、それによってこの時代のフランス文学・芸術に関する理解を刷新するという目標である。

２．研究の目的

フランスの近代文学史、また芸術史において、1870 年代を中心とした十数年間は重要な転換期とみなされてきた。しかしながら、近代詩における象徴主義にせよ、また絵画史における印象派の登場にせよ、従来の研究の多くはこれらの革新を支えたとされるごく数名の「偉大な」創作者（マラルメ、ランボー、マネ、セザンヌ等）たちに関心を集中させるばかりで、この時代の文化的転換の全貌をバランスよく捉えてきたとは言いがたい。思想史に関しても事情は同様で、十九世紀のフランス哲学は、通常、「折衷主義」や「スピリチュアリスム」といった流派名、そしてコントやデュルケムなどの大人物の名を結ぶようにして、駆け足で紹介されてしまうことがほとんどである。

こうした巨視的展望が自然化されることによって見落とされてしまうものは少なくない。それに対し申請者は、うえに述べたような研究を通じて、既存の支配的展望のなかで忘却されてきたマージナルな存在に目を向けることが、結果として当代の文化的変容に関するより俯瞰的な展望を得ることにつながる、との確信を得てきた。こうした問題意識を起点に据えることにより、本研究は次の二点を目的として設定することとする。すなわち、①シャルル・クロという存在を結節点として浮かびあがる同時代の知や文化のコンテクストを明確化し、②この作業の成果をもとにして、同時代のフランス文学・芸術に関する既存の言説を――いわば微視的な観点から――刷新する、という二点である。その際、次項に述べる通り、クロという「結節点」にとりわけ深く関連する「文学」と「科学」の二領域に関連する小課題を複数設定し、それらの成果の綜合をはかることによって上記の課題の達成を目指すこととする。

３．研究の方法

以下、本研究の方法を（１）第一年次（半年間）、（２）第二年次の順に記載する。

（１）アントワーヌ・クロの業績の分析

第一年次ではクロの長兄であったアントワーヌ・クロの業績を精査する。著名な医師・生理学者であるとともに、思想家としても複数の著作を発表したこの人物は、周囲の芸術家たちにも少なからぬ影響を与えた。のみならずこの人物は、若きシャルルがはじめての創造実践――ピアノ演奏自動記録装置（1865 ごろ）の制作――をおこなった際、協力者としてただ一人この仕事を共有した貴重な存在でもある。興味深いことに、彼らふたりの兄弟は、このときの発明実践から「人間の知覚のはたらきを機械によって代理再現する」という構想を獲得し、これを端緒として以後それぞれの知的探求の想を育んでいったとされる。

本研究では、初年度の半年間をかけ、当の共同作業の後にアントワーヌの側で見られた最初の体系的な仕事である『神経システムの高位機能』（1874）を調査する。上記の通りの影響力を有した親近者の著作を分析することで、クロの周囲で共有されていた哲学や科学的な知のありかたを、当時の動向に即して把握するためである。その際、この人物の関心の対象が、フランス国内のみならず、同時代のイギリスならびにドイツの哲学・生

理学にまで向けられていたことに留意し、当該領域に見られた同時代のパラダイムの変遷を見渡すような視点を維持する必要がある。

（２）文学的小集団、サロン等の調査

最終年度となる二年次においては、クロとその関連人物たちの交流を跡づける基盤的調査にまず着手する。具体的には、クロの主要な交流の場となった幾つかの文学的小集団（セルクル・ジュティック／ヴィラン・ボンゾム）ならびにサロン（ニナ・ド・カリアス、カミーユ・フラマリオンのサロン）などに関する資料を通覧し、これらの場における人々の交友関係の大要を把握する。

続く作業として、第一に上述した場のなかで実際にどのような文学的営為が実践されていたのかを調査する。ランボーやヴェルレーヌも参加した『アルバム・ジュティック』、クロやヴィリエ・ド・リラダンによるショートショート的作品、「モノローグ」と呼ばれる独白劇の上演用テクスト、ならびに『新世界評論』をはじめとする小雑誌上の雑多な文章群、等々がここでの分析の対象となる。

第二に、上記の場が文学以外の領域に身をおく人物たちにも開かれていたことに目を向け、彼らのうちの幾人かとクロの（とくに科学的業績との）関連性を探る。具体的には、印象派の先駆となったマネや、動態写真のパイオニアとして知られるエチエンヌ＝ジュール・マレー等、当代の視覚表象の変遷に大きく寄与した人物がクロと交流の場をともにしていたという事実に着目し、彼らの仕事が連接する可能性を跡づけていく。

（３）上記の研究の綜合

最終的に、第一年次の研究成果と二年次のそれとを綜合し、シャルル・クロの周囲でなされていた創造実践や知的探求の実態をコンテクスト化する。そうした作業を経て浮かび上がる「シャルル・クロをひとつの結節点とした 1870 年代の知のネットワーク」と呼びうるものを、既存の一般的な文学史・芸術史と対照させたうえで、後者のうえに補填しうる空隙、刷新しうる展望が認められるかどうか検証する。

４．研究成果

以下、（１）シャルル・クロ周辺の文学実践、ならびに（２）科学的状況、そして（３）今後の展望の順に研究成果を報告する。

（１）「ヴィラン・ボンゾム」や「セルクル・ジュティック」等の文学的小集団、ならびに、諸々のサロンやカフェに関連する資料をもとにして、それらの場でなされていた文学実践の特徴を以下の三点にわたって報告する発表を行った（発表②）。第一に、これらの場から生みだされたテクストのなかに、作者の単一性を自明視する伝統的な文学観を越境するような遊戯的ふるまいが観察されること。第二に、これらの小集団や当時のサロンに見られた人々の交流や、そうした場で共有されていたある種の親密さを前提としたテクスト群が存在するということ。第三に、カフェやサロンでの作品朗読や、大流行した独白劇の文化など、文字ではなく音声を介した文学の生産・受容のありかたが一定のプレゼンスを示していたということ。以上三点である。

報告に際しては、一九世紀末から二十世紀初頭のアヴァンギャルドたちの文学実践との連続性という観点から、上記三点の特徴を通時的に位置づけることを試みた。実際、ここにみた諸特徴は、象徴主義に始まる後続の文学運動のありかたを視野に収めることで、その意義をより明確なものとするように思われる。研究相談に応じてくれたマギル大学のアルノー・ベルナデット教授の言によると、本研究も参照したセス・ウィドンによる「コラボレーション」文学研究をはじめとして、同種の観点を有した研究が少しずつかたちをとりつつあるようである。こうした動向を見極めながら再度の整理を行い、改めて研究成果を公表したい。

（２）基盤的な研究としてアントワーヌ・クロの著作を分析する機会を得たことにより、この時代のフランスの科学的・思想的知のうちに流れ込む多様な傾向を確認することができた。なかでも重要な発見となったのが、神経生理学という新興の知がこの人物のまわりで無視しえない存在感を放っていたということである。

加藤有希子が指摘する通り、当代の神経生理学は、人間の感覚現象や身体運動の原因を神経刺激の経済へとひとしなみに帰着させようとする一元論的発想を、隣接する諸領域に拡張しようとしていた。こうした知見を獲得することにより、シャルル・クロの周辺で見られた種々の科学的実践や芸術運動に、これまでは見ることのできなかった関連性を見出すことができるようになった。発表③ならびに書籍②の一部では、こうした観点に基づき、エチエンヌ＝ジュール・マレーらのグラフ的観察法、印象派から新印象派へといたる絵画運動、ギュスタブ・カーンによる「自由詩」運動を再評価する観点を提示した。

こうした視野の拡大は、シャルル・クロが関係したもうひとつの重要な領域である「音の記録・再生」の問題の歴史性を再考するうえでも大きな進展をもたらした。この研究分野では、英語圏に見られた近年の発展にともない、録音技術の歴史を音楽のみに限定されない広範な観点から構築することに高い関心が集まりつつある。その際フランスという地域は、シャルル・クロというパイオニアが存在したことのみならず、当の技術をモチーフのひとつにした文学作品が早くから生みだされてきたという意味でも、重要な観察対

象とされている。こうした動向に応じるべく書籍①を執筆したほか、発表①③、ならびにそれらの内容をまとめた書籍②では、フランスにおける録音技術の誕生と普及のありかたを、上述したようなクロ周辺の状況を踏まえた観点から再整理することを試みた。

（３）一年半と研究期間そのものは短かったが、当初設定したもののうち、「シャルル・クロという存在を結節点として浮かび上がる同時代の知識や文化の水脈を明確化する」という目標に関しては、ある程度の成果が見られたように思う。一方で「この作業の成果をもとにして、同時代のフランス文学・芸術に関する既存の言説を――いわば微視的な観点から――刷新する」ことについては、十分に体系化された成果を得ることができなかった。これを実現するためには、おそらく、本研究が設定した「1870 年代」という枠組みをいま一歩拡大し、今回の研究から得られた数々の知見をより広い歴史的展望のもとで通時的に捉えていく必要がある。例えば、上記４−（２）で述べたクロ周辺の文学実践の諸特徴は、後続する世代のそれ、例えばマンデスらによるモデル小説の試みや、アルフォンス・アレが好んだ脱主体的なテクスト実践などとのつながりのもとで、その意義を再度問い直されるべきであろう。

他方で、科学方面での成果をまとめるに際し、知はいかようにして文学や芸術と関係を結ぶのか、という基本的な問いかけの重要性を再認識することともなった。現状では未消化ながら、同種の問題に長らく取り組んできたモントリオール大学のミシェル・ピエルサンス氏と面談する機会をもつことができ、この点に関する有益な助言が得られたことは大きい。ピエルサンス氏とは今後の研究の遂行や成果公表のために継続的に連携していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　0 件）

〔学会発表〕（計　3 件）

①福田裕大・金子智太郎・榑沼範久・福田貴成、「「音と聴取のアルケオロジー」再論――「聴覚性」批判からの展望」（パネルセッション）、表象文化論学会第 10 回研究発表集会、2015 年 11 月 7 日、於：東京大学（東京）

②福田裕大「シャルル・クロから見るシュルレアリスム――再接続の試み」、関西シュルレアリスム研究会第五回研究発表会、2015 年 8 月 1 日、於：近畿大学（大阪）

③福田裕大、「録音再生技術の歴史的位置づけ、ならびにフランス文学研究との接点」、シンポジウム「声と文学　第２回」（早稲田大学文学部フランス文学研究室・東京大学文学部フランス文学研究室）、2014 年 12 月 13 日、於：早稲田大学（東京）

〔図書〕（計　2 件）

①福田裕大「フランスにみる録音技術の黎明期――来るべき「録音技術と文学」のために」、塚本昌則・鈴木雅雄（編）『声と文学』、平凡社、2016 年（近刊）

②谷口文和・中川克志・福田裕大『音響メディア史』、ナカニシヤ出版、2015 年

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕（計　1 件）

ホームページ等

①福田裕大（年表作成・編集）「音響技術と文学 年表」、塚本昌則・鈴木雅雄（編）『声と文学』、平凡社、2016 年（近刊）

６．研究組織

(1)研究代表者

福田　裕大（FUKUDA, Yudai）
近畿大学・法学部・講師
研究者番号：10734072

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：